

「感謝の思い」こそ、実践の原動力

上 廣 榮 治

ソチ冬季オリンピックの熱戦が終わりました。この原稿を読まれる頃には、パラリンピックも終わっていることでしょう。この期間を通じて、すべての選手たちがまるで常套句じょうとうくのように口にしたのが「感謝」という言葉でした。しかし、それは決して決まり文句ではなく、選手たちの偽らざる思いに違いないと、私は感じました。

スノーボードの女子パラレル大回転で見事な活躍を見せた竹内智香たけうちともかさんの場合は、名コーチ、フェリックスさんの助言で、練習の拠点をスイスから日本に移した結果の銀メダルだったそうです。

環境や技術にすぐれたスイスを離れることに不安を感じていた竹内選手に、フェリックスさんは、「本当にオリンピックで勝ちたいなら、日本に戻ろう。日本チームとして日本のスタッフにサポートされ、日本の人々の応援を受けて、オリンピックのスタート台に立つことが大切だ」と強く説得したといえます。

スイスチームと練習すれば技術的には完全な準備ができるかもしれない。しかし、それだけでは勝てないとフェリックスさんは言ったそうです。心から自分を応援し、支えてくれる人たちがいてこそ、オリン

ピックは戦える。その人たちの思いを受け止めて、「感謝の思い」で戦ってこそ、実力以上の力が出せる。彼はそう考えたのです。結果はその通りになりました。

竹内選手だけではありません。結果を残せた選手も、残念ながら力およばず敗れた選手も、みな「感謝の思い」を胸に戦ったのです。そのことは、結果の如何にかかわらず、応援し続けた人たちに、しっかりと伝わったに違いありません。

金メダルを期待されながらメダルを逸したフィギュアスケートの浅田真央さんの場合もそうでした。前日の失敗を乗り越えて、人々の思いを胸に精一杯頑張った浅田選手に、世界中の人たちが感動し、金メダル以上の、称賛の拍手を送ったのでした。

大会を通じて、私たちは多くの共感と感動をもらいました。努力を重ねて磨き抜いた技と「感謝の思い」が一つになったとき、たとえ敗れても、人々は共感し、感動したのです。

オリンピックでは、ほとんどの選手がメダルや入賞を目指して戦います。しかし、大多数の選手が望みも虚しく敗れ去ります。しかし、その敗者一人ひとりに、並々ならぬ努力の日々と、選手を支えてきた多くの人たちの物語があったはずです。敗れた悔しさ、期待に応えられなかった申し訳なさと、だからこそ、再起を期する強い思いが伝わってきました。

勝者も敗者も、「感謝の心」が彼らの「人間力」を一段と高めていることがありありと見て取れます。「感謝の思い」こそが、人を前進させる原動力だと、つくづく感じたものでした。

そんな感慨にふけていたとき、ふと、コメディアンの萩本欽一さんの話を思い出しました。

昔、萩本さんが進行役を務めるオーディション番組の中で、彼は一人の少年に「好きなものは何？」と

尋ねました。当時十五歳だった少年は答えました。「お母さんが作ったお稲荷いなりさん」と。予想外の答えに萩本さんはびっくりしました。そして、「ここに将来の大スターがいる」と直感し、胸が高鳴ったといいます。

ふつう、この年齢の少年が好きなものといえば、チョコレートなどのお菓子か、ハンバーグやスパゲッティで、子どものタレントなら「躍り食い」などと言いつい出しかねないと思っていたのに、古風で家庭的な「お稲荷さん」で、しかも「お母さんが作った」という限定までついていたのです。この年齢になると、人前で「お母さんが」とは、なかなか言わないものです。萩本さんは、そこに並々ならぬものを感じたのです。

この少年は、お母さんが一生懸命お稲荷さんを作る姿を見て育ってきたのでしょう。お母さんも、そういう姿を子どもにきちんと見せてきたのでしょう。だからこそ少年は、大人が仕切る芸能界に接していても、見るべきところはしっかりと見ることができ、感性の豊かさを備えていたのでしょう。

芸の道で最も大切なものは「感謝の気持ち」だと常々思っていた萩本さんは、好きなものは「お母さんが作ったお稲荷さん」というひとことで、少年が将来は大スターになると予感したというのです。

このことがあってから数年後、その少年は、ある女性誌の企画、好きな男性タレントのランキング上位に選ばれ、翌年には一位。以来、十五年連続でその座を守っているそうです。彼の名は木村拓哉きむらたくやさんです。芸能界の大先輩として多くのタレントを見てきた萩本さんの予感は、見事に的中したのです。

しかし、私たちの日常はオリンピックの選手や芸能人のように、多くのスタッフに支えられ、多くの人たちに応援されているわけではありません。その意味では恩を感じにくいといってもいいでしょう。そん

な中で、目には見えない人々の支えに、心から感謝できるかどうか。それは、その人の人間性にかかわる問題です。毎朝、「三つの恩を忘れない」と誓っている私たちでさえ、常に「感謝の心」を持っているかと改めて問われれば、自信がないという会友も少なくないのではないのでしょうか。「感謝の心」は目に見えず、捉えどころがないからです。

では、どうしたらよいのでしょうか。見えないものは、見えるようにすればよいと、私は思います。たとえば、モノやサービスをお金で買ったとき、あなたは「消費者は王様」の気分になってはいないでしょうか。そのモノやサービスの背後にある自然の恵みや無数の人々の苦勞に思いを致しているのでしょうか。言葉や表情、態度や振る舞いとして、その思いを形に表わしているのでしょうか。人と接するときも同じです。一期一会いちごいちえの感謝の思いを一挙手一投足のすべてで相手に伝えることができているのでしょうか。

鉄道員が「指差し確認」で安全を確認するように、私たちも言葉や態度で「感謝の心」を示せばよいのです。形に表わすことで、「感謝の心」は確認され、ますます高まっていくに違いありません。

問題は逆境にあるときです。ものごとがうまくいっているときに感謝することは容易です。しかし、苦難に直面したときにも「感謝の思い」を持ち続けられるかどうか、それが問題です。

逆境の現実があるがままに受け容れて、天から授かった貴重な試練と思いつめて、逆転への一步を踏み出せるかどうかです。どんなに辛い現実にあっても、大自然の摂理の下で、今あることに感謝できるかどうかです。自分の今を肯定し、感謝してこそ、再出発の力も湧いてくるのです。「感謝の心」こそが、より善くあろうとする原動力であり、その大きさが「人間力」の大きさでもあるのです。

喜働も、愛和も、三つの無駄を排すことも、すべての実践は「感謝の心」から発するのです。